

# 『奈良県社会科診断テスト』における情意的学力の問題開発に関する史的研究 —報告書及びテスト問題作成者へのインタビューの分析を通して—

坂井 誠亮

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

---

## Historical Study of the Development of “Emotional Achievement” Measures in the Nara Prefecture Social Studies Diagnostic Test: Analysis of reports and interviews with the creators of test questions

Seisuke SAKAI

Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

The purpose of this study is to analyze the development process of test questions concerning "emotional achievement" in the Nara Prefecture Social Studies Diagnostic Test. Specifically, the research targeted test questions dealing with "interest, will, and attitude," as these have been under development based on the results of the Nara Prefecture Social Studies Diagnostic Test for about twenty years. The test-related focus of analysis included the objectives of question creation, the questions themselves, and associated problems. As a result of the study, it became clear that a more realistic context should be included in the test in order to motivate students to learn. When students created "why-questions", they needed stories that provided a context.

キーワード／奈良県社会科診断テスト, 情意的学力, 関心・意欲・態度の筆記テスト

Key words／Nara Prefecture Social Studies Diagnostic Test, emotional achievement, written test of "interest, will, and attitude"

---

### I はじめに

本研究は、『奈良県社会科診断テスト<sup>①</sup>』における情意的学力のテスト問題開発の改善過程を史的に明らかにすることにより、「関心・意欲・態度」のテスト問題作成に一定の示唆を得ることを目的とする。

そもそも、情意的学力である「関心・態度」を重要な観点として学習指導要領に位置づけた中野重人は「関心とは、端的に言って、気にかかることであり、心をひかれることである。」(中野, 1985: 45)とし、「態度は、あの状況のもとでは、ある一定の見方や感じ方、行動をするという心的な準備状態であり、人があらゆる対象や場面に対して、どのような反応をするかに指示的な影響を

及ぼすもの」(中野, 1985: 47)であり、「知識・理解、技能などの認知的側面に方向性を与え、行動のエネルギーや情熱を供給するものである。」(中野, 1985: 46-47)としている。すなわち、中野は「関心」とは、気にかかる、心をひかれることであり、「態度」は、知識・理解、技能などの認知的側面に方向性を与え、行動のエネルギーを供給するという非常に重要な観点として位置づけている。これを踏まえた上で、筆者は「関心・態度」を以下のように定義付ける。まず「関心」とは、気にかかる、心をひかれるという興味に近い静かな感情である。「態度」とは、認知的側面により培われた感情や意志が行動としてあらわれたものである。次に「態度」は、「探究的態度」と「規範的態度」に分類することができる。すなわ

ち、「探究的態度」とは、問題を発見し、予想や仮説を立てて、問題解決に向けて追究する姿のことであり、「規範的態度」というのは、学習で得た知識をもとに、価値判断したり、そこで得た価値観を実生活に活かしている姿のことである。

さらに、平成元年度版学習指導要領の改訂に伴い、指導要録の観点別評価項目において「意欲」が追加されたが、この「意欲」を、積極的に～しようとする気持ちであり、主体的な活動を引き出し、追究を生み出す動的な感情であると定義付ける。なお、「関心」と「意欲」は、静的感情から動的な感情へというように一連の感情であるということから、区別せずに「関心・意欲」と位置づけることとする。

そもそも、「関心・意欲・態度」といった情意的学力は、「その子どもの心情・考え・経験などに裏打ちされた体制とも言うべきものであり、一人ひとりの子どもの体制は、広く、深く、実にさまざまであり、常に可変的である。」(次山, 1995: 34)その為、長期にわたって緻密で継続的な児童観察が要求されるものであり、ペーパーテストのみによる評価だけでは、その表面的な部分や一時的な部分しか明らかにすることができないものである。しかし、ペーパーテストは、限られた時間内で全員の児童に対して、要求したい条件を焦点化し問うことができるという点においては、極めて有効な要素を持つ評価でもある。故に、児童の学習行動・学習態度の観察、話し合い活動における発言の分析、学習過程で作成した作品(ノート・感想文・地図・年表等)といった様々な評価資料の分析結果とペーパーテストを併用することにより、一人ひとりの児童の情意的学力を質的にも、量的にも評価することが可能なものとなるのである。

我が国において、小学校社会科における情意的学力の評価研究に関しては、まず山崎林平は、情意的・技能的領域の評価について、ノートやレポートに文としてまとめることが有効であると述べた(山崎, 1980: 189-191)。また、東京都千代田

区立佐久間小学校は、「関心・態度」の評価法として行動観察法、発言分析法、作品分析法といった評価方法を用いて行った(佐久間小, 1983: 26)。この他に、佐賀県鳥栖小学校では、「関心・意欲・態度」の評価法として、表情、つぶやき、ワークシートの文章、日記等をあげた(鳥栖小, 1993: 25)。しかし、情意的学力の評価方法としてのペーパーテストについては述べられていない。

また、社会科の情意的学力を問うペーパーテストに関しては、次山信男の研究がある。次山は、「関心・意欲・態度」を問う問題として、問題場面テストの有効性を挙げ、具体的な問題例を示した(次山, 1995: 16)。しかし、ここでは「関心・意欲・態度」を問う問題例は示されたが、実践を通して得たデータの分析をもとに、そのテスト問題が実際に有効であるのかということについての検証は行われていない。

そこで、本研究において、『奈良県社会科診断テスト』を取り上げ、テスト問題開発の過程について史的に検討する理由は、以下の通りである。すなわち、『奈良県社会科診断テスト』は、これまで約半世紀の間、県内のほとんどの小学校で実施されてきた学力診断テストであり、奈良県小学校教科等研究会社会科部会(以降、奈良県小社研とする)が、テスト結果の綿密な分析をもとに、継続的なテスト問題の改善を行ってきたものである。また、『奈良県社会科診断テスト』は、より良い情意的学力のテスト問題作成をめざして、20年以上も取り組んできたものである。その経緯を史的に検討することは「関心・意欲・態度」のテスト問題作成に一定の示唆を得ることができるといえよう。

『奈良県社会科診断テスト』は、1958年度版『小学校学習指導要領・社会科編』の主旨である地理や歴史の基礎的理解や系統性の重視のもと、1961年度に、第1回『奈良県社会科診断テスト』が4年生から6年生の児童を対象として実施された。それ以降、今日まで、毎年作問されてきたのである。そこで、『奈良県社会科診断テスト』が、

どのような観点で作問されてきたのかを示したのが表1である。

表1は、『奈良県社会科診断テスト』の評価の観点が変更した年を取り出し、表に整理したものである。ここからも明らかなように、『奈良県社会科診断テスト』に「関心・態度」という情意的な観点に加えられ、奈良県小社研が積極的に「関心・態度」のテスト問題作成に取り組み始めたのは、1988年度の第28回からである。尚、1991年度の児童指導要録の改訂に伴い、1992年度の第32回では、「読図」、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「資料活用」、「知識・理解」という5観点到整理され、今日に至っている。

## II 分析視点と研究方法

『奈良県社会科診断テスト』における「関心・意欲・態度」の問題を検討するにあたり、その分析視点として、以下の3点を挙げる。

- ①問題作成のねらい
- ②テスト問題の事実と考察
- ③テスト問題の成果と課題

まず、①問題作成のねらいについては、奈良県小社研が、どのようなねらいを持って作成した問題であるのかということについて、当時、直接に作問にかかわった教師へのインタビュー、及び毎年出されている『奈良県社会科診断テスト』報告書<sup>2)</sup>の分析により明らかにする。

次に、②テスト問題の事実と考察では、どのよ

うなテスト問題が作成されたのか、また、受験した児童の解答は、どのような傾向性がみられたのかについて、『奈良県社会科診断テスト』報告書の分析をもとに明らかにする。

そして、③テスト問題の成果と課題については、作成されたテスト問題は「関心・意欲・態度」を問う問題として、妥当性や信頼性<sup>3)</sup>はあるのか。また、どのような成果や課題を残したのかについて明らかにする。

## III 研究の内容と考察

### 1 情意的学力を問うテスト問題開発の経緯

『奈良県社会科診断テスト』では、1988年度の第28回から、毎年全ての学年で組織的に情意的学力に関するテスト問題が作成されている。このことについて、当時、社会科診断テスト事務局を担当していた井上良弘は、次のように述べている。「平成元年指導要領の改訂が行われ、『生きる力』がうちだされ、新学力観が提唱された。そのような背景の中、当時会長であった大西重次先生から『関心・意欲・態度』を問う問題を作るように助言をいただいた。観点『関心・意欲・態度』がペーパーテストで診断できるのか、どのような問題ならば耐えうるのか、ずいぶん悩んだことを思い出す。」(奈良県小社研、2007:267-285)

一方、井上に、観点「関心・意欲・態度」のテスト問題を作成するように指示した大西重次は、その経緯について、以下のように述べている。

表1 『奈良県社会科診断テスト』における評価の観点の変遷

年度	評 価 の 観 点			
1961(第1回)	読図力	地名・用語		
1962(第2回)	読図力	地名・用語	統計図表の理解・考察、歴史的意識・考察	政治・経済・社会
1963(第3回)	読図力	地名・用語	地理的考察(統計図表も入れて)、歴史的考察(一部政治)	
1981(第21回)	読図能力	知識・理解	資料活用能力、比較観察能力、問題解決のために資料を選択する能力	
1982(第22回)	読図力	知識・理解	観察、資料活用、思考・判断	
1988(第28回)	読図力	知識・理解	観察、資料活用、思考・判断	関心・態度
1992(第32回)	読図	知識・理解	思考・判断、資料活用	関心・意欲・態度

(筆者作成, 2008)

「文部省の中野重人先生が、懇意にしてくださっていたから、その時の改訂の内容の『関心・態度』について社会科では非常に重要な要素であるけど、それをどのように評価すればよいのか、それは全国的にどこも手を付けてないんだと、幸い奈良県では、ずっと以前から診断テストをしておられるので、そういうことが可能なかどうか、ぜひ研究していただけたら…と、中野先生が言っておられました<sup>(4)</sup>。」

ここで、大西は『奈良県社会科診断テスト』で、「関心・意欲・態度」の作問に踏み出した理由として、当時、文部省教科調査官であった中野重人からの『関心・態度』のテスト問題作成の要請があったことを明らかにした。

続いて、大西は、以下のようにも述べている。「指導要録の改訂により、『関心・態度』に『意欲』が入り、『関心・意欲・態度』という観点になったのです。この『意欲』は、奈良県小社研が、研究主題としてずっと研究してきた『主体的な学習』ということですから、これまで、子どもに意欲を持たせるには、どういう学習方法がよいのかということの研究発表してきたことでもあるので、それらのことを考えて診断テストに入れてくれへんかと評価研究部に言うたんです<sup>(5)</sup>。」

以上のことから、大西は「関心・意欲・態度」の「意欲」を「主体性」と解釈し、これまでの奈良県小社研の研究結果である「主体的な学習」を踏まえて「関心・意欲・態度」のテスト問題作成に乗り出したことが明らかになった。

さらに、「関心・意欲・態度」のテスト問題を導入する上で、大西は、以下のような助言を行ったのである。

「しかし、関心とか態度とかはね、さて、ペーパーテストではどのように表れてきて、それを数的な評価でだすというのはむずかしい。問題としては、できないという声も多かったと思うんです。せやけど、文章表現で書かせたら、何か出てくんのとちがうか。文章表現が難しかったら、選択肢をこしらえて、そして、どういう子どもたちが、

どういうこと考えているかということを引き出せるのとちがうか、と意見したんです<sup>(6)</sup>。」

以上のように、大西の強いリーダーシップのもと、奈良県小社研は情意的学力の問題作成に取り組んだのである。

## 2 『奈良県社会科診断テスト』の情意的学力の構造

ところで『奈良県社会科診断テスト』の情意的学力の構造については、情意的学力を問うテスト問題開発に、奈良県小社研評価研究部長として中心的に取り組んできた秋元直樹は、「『奈良県社会科診断テスト』は、奈良県内全体の児童を対象に作問している以上、あくまでも学習指導要領に則って作問をしました<sup>(7)</sup>。」と述べている。

すなわち、平成元年度版から平成11年度の学習指導要領において示されているように、第3・4学年では、身近な地域社会への関心と地域社会の成員としての自覚や愛情について、第5学年では、我が国の産業や自然環境・国土への関心と愛情について、第6学年では、我が国の歴史への関心と国を愛する心情、そして平和を願う日本人としての自覚と世界の人々との共生についての問題開発を行ったのである。

さらに、奈良県小社研は、社会科において児童に身につけさせたい情意的学力の基礎・基本として「社会事象から導き出した問題を自分自身のものである」として切実感を持って捉え、問題解決のために意欲的に調べ、練り合い、表現することを通して新しく社会事象への発信、参加、参画を切り拓くことである。(奈良県小社研、2004:6)とし、問題解決力や表現力等も情意的学力の要素としたのである。

## 3 情意的学力を問うテスト問題分析

### a 自分の意見を選択肢から選ばせるテスト問題

その後、奈良県小社研では、全学年で組織的に「関心・態度」のテスト問題作成に取りかかり、1988年度に表2のような問題を作成した。

### ① 問題作成のねらい

表2の問題は、公害をなくすために正しいと思う意見を選択肢の中から選ばせる、「態度」の問題である。

### ② テスト問題の事実と考察

表2は、クラスで学習したことをもとに話し合うという場面を設定し、その中で自分が正しいと判断する事柄を選択させる第5学年の問題である。正答率は86%で、ほとんどの児童が正答する常識的な問題であったといえる。

表2 1988年度の「態度」の問題

〔う〕まさお君たちは、身近な公害について話し合っています。正しいことを言っていると思う人を二人選んで、その人の名前を口書きに書きなさい。  
まさお…公害については、家庭でも燃えるゴミ・燃えないゴミをわけたり、無リン洗剤を使ったりして十分に努力しているので、あとは警察にまかせておけばよいと思う。  
たけし…現在では公害を防ぐ法律が決められ、公害を防ぐ技術も発達してきたこともあって、公害のおそれもなく、安心してくらすようになったと思う。  
あきら…公害はまだまだなくなっていないので、ぼくたちもまわりの環境が悪くならないように心がけていくことが大切だと思う。  
よしお…公害に気がついたら、住民が公害の調査をしたり、署名を集めたりして、みんなの願いを市や県に訴えていけばよいと思う。

(奈良県小学校教科等研究会社会科部会：奈良県社会科診断テスト報告, 82, 奈良県小学校教科等研究会社会科部会, 1988)

### ③ テスト問題の成果と課題

表2の問題は、正しいと思う解決方法を選択肢から選ばせることより「態度」を問う問題である。このような問題パターンは、1988年度から1991年度まで、非常によく出題されたものである。また、正答と誤答が明確な選択肢の問題ということで、一定信頼性を備えた問題であるといえるが、「態度」を伴わない言葉だけの解答になる恐れがあるという点で、妥当性において課題がある。より本音に近い解答が得られるように工夫をする必要がある。

### b 自由記述によるテスト問題

1992年度の第32回から1994年度の第34回まで

の3年間、表3のような「あなたの考えを書くページ」という問題を設定し、「関心・意欲・態度」の評価を試みた。

### ① 問題作成のねらい

奈良県小社研では、「関心・意欲・態度」のテスト問題として、児童に自由に意見を書かせる問題を採用した。ここでは、資料から自分はどのような考えを持ち、どのように自分の生活に生かしていこうとしているのかということ的自由に書かせることにより、「態度」を評価しようとしたのである。

### ② テスト問題の事実と考察

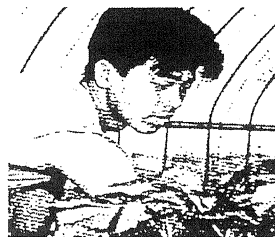
表3は、1993年度の第33回で出題された第5学年の問題である。

農家のあとつぎが減少しているという事実と71人の若者が県立農業高等学校で、新しい農業のあり方を熱心に学んでいるという事実から、農業の後継者問題についての自分の考えを書かせることにより、「態度」を評価しようとした問題である。

表3 1993年度の「態度」の問題

#### あなたの考えを書くページ

〔い〕「わたしたちの食生活と農業」の学習のしめくりに、次の文や写真を見て農家のあとつぎの問題について話し合いました。この問題について学習新聞にまとめます。あなたの考えを書きなさい。



奈良県の農業においても、農家のあとつぎをする人の少ないことが大きな問題になっています。しかし、そんな中であって、桜井市にある県立農業高等学校では、71人の若者が新しい農業をめざして、毎日、勉強や実習に熱心に取り組んでいます。

(奈良県小学校教科等研究会社会科部会：奈良県社会科診断テスト報告, 41, 奈良県小学校教科等研究会社会科部会, 1993.)

ここでは、予めA、B、Cといった評価の基準を設定している。A評価は、これからの農業の問題を自分との関わりで捉え考えようとしている。B評価は、今まで学習したことや資料の読み取りのうえに立って、日本の農業の現状を理解し、疑問や感想を述べているものである。C評価は、知識や理解や資料の読み取りにとどまっているものである。

次に、それぞれの評価のパーセンテージと児童の回答の具体を、以下のように示す。

《A評価》 …12.5%

「これからの農業のために、がんばっている人たちの様子をみんなに伝えたい。」

「新しい農業の取組について調べたい。」

《B評価》 …42.6%

「このお兄さんのように、日本の農業を守るために、農家のあとつぎが増えてほしいな。」

《C評価》 …22.9%

「最近では、農家のあとをつぐ人が少なくなってきた。」

### ③ テスト問題の成果と課題

まず、児童に自由に考えを書かせることにより「態度」を問う場合、どのような評価の基準を設定したのかということが課題となる。すなわち、A評価である「これからの農業の問題を自分との関わりで捉え、調べたり、考えたりする」は、B評価である「今まで学習したことや資料の読み取りのうえに立って、日本の農業の現状を理解し、疑問や感想を述べる」よりも優れた「態度」であると評価できるのかという点において課題がある。もし日本の農業の現状を十分に理解することなしに、ただ単に自分の問題として調べ考えたなら、主観的な視野の狭い捉えになる恐れがある。逆に、現状をしっかりと理解した上で、疑問を発見することができたなら、切実な学習問題につながる可能性が高いのである。ゆえに、評価の基準の妥当性に課題があるといえる。

また、A評価とされている「新しい農業の取組について調べたい。」は、調べたいと思う根拠が

示されていない為、これだけでは正しく評価することができない。すなわち、評価者によって、その捉えも変わってきて、十分に信頼性を保障するものになっていないのである。

この点について、秋元は、「子どもに考えを書かせる問題は、状況的に続けるのはしんどいし、ここで役割は終わったと判断した。県のテストを作る場合、一番気を使ったのは、県社研の専門委員ではない一般の先生方が、特に、A、B、Cの3段階に振り分ける時に、採点者が納得するように分けなあかんということです<sup>(8)</sup>。」と述べている。すなわち、秋元は全県を対象とする診断テストにおいて、児童に自由に考えを書かせたものを、全ての教師が同じ尺度で評価するという客観性の追求に困難を感じたのである。

### c 「なぜ疑問づくり」によるテスト問題

1995年の第35回からは、表4のような「はてな?からはじめよう」という問題を設定し、「関心・意欲・態度」の評価を試みた。

#### ① 問題作成のねらい

「なぜ疑問づくり」により、「関心・意欲」を評価する理由として秋元は、「こういうスタイルは、まさに問題解決学習ですね。問題解決学習の中で、当然、学習問題が成立しなかったなら、その後の展開はないわけです。子どもの主体的な学習ということで、当然、教師の授業構成の中で、組み込まれている話であり、子どもを動かせるということ、まず、子どもの学習問題を作っていくということが一番ポイントなわけです。最初の学習問題を成立させる原動力というのは、『関心・意欲』ということになります<sup>(9)</sup>。」と述べている。

すなわち、「それまでの体験に基づく情報や、学習の結果得た情報を覆すような情報が提示されることにより、『なぜ』といった強い知的好奇心が喚起される。」(岩田, 2001: 129)のである。故に、奈良県小社研では、知的好奇心を伴った質の高い「なぜ疑問」を作ることができたということは、高い「関心・意欲」を持つことができたとい



① 問題作成のねらい

奈良県小社研は、そもそも「関心・意欲」は、楽しい授業を児童が受けることにより育まれるものであるとし、「関心・意欲」を問うテストの構成においても、楽しい授業を想起させるようなストーリー性を持たせることが必要であるというねらいのもと、表5のような問題を開発した。

このように、テスト問題にストーリー性を持たせることに対して、秋元は「テストで授業が想起できるようなストーリー性のある問題を作成し、その過程で『関心・意欲・態度』を問う、ストーリー性の中で、いかにも楽しい授業を受けているような感じにさせようと思いました<sup>(10)</sup>。」と述べている。すなわち、調べた情報を資料化することにより学習問題が生まれ、それを追究することで、より自分にとって切実な問題となっていくという学習過程をテストにおいて設定することにより「関心・意欲」を評価しようとしたのである。

② テスト問題の事実と考察

表5の問題は、1998年度（第38回）『奈良県社会科診断テスト』の第4学年で出された問題である。まず、自分たちの身の回りのごみのゆくえを調べていくうちに、自分たちのごみが市の処理施設に運ばれていることを知る。そこで、市の処理場に集められるごみの量が、市の人口の移り変わりと関係があるのかどうかを調べるためにグラフを作成する。その過程で、「あれっ。」という「なぜ疑問」にぶつかる。それが、新たな学習問題になる。そして、その学習問題を調べる中で、市では、ごみを減らすために工夫や努力をしていることに気づき、自分たちもごみを減らすために何かできることはないのかを考えさせるといった問題構成になっている。すなわち、表5の問題は、まるで単元を通して授業を受けているようなストーリー性を持たせた典型的な問題であるということを取り上げたのである。

以下では、〔い〕の問題について分析を行ってみよう。この問題では、「なぜ、市の人口が増えているのに、1991年からごみの量が減っている

ののだろうか。」のように、ごみの量と人口の移り変わりの関係を正しく読み取った上で、「なぜ疑問」が作れているものを正答とした。

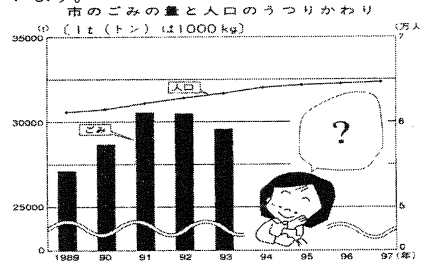
表5 1998年度の「関心・意欲」の問題

〔3〕 あきこさんの学級では、自分たちの家のごみ調べをした後、市のごみについて調べることにしました。次の〔あ〕・〔い〕・〔う〕の問いに答えましょう。

〔あ〕 あきこさんたちは、しゅう集車で仕事をしているおじさんたちが、ごみをどのようにくふうして集めているか調べてきました。そして、わかったことについてみんなで話し合っています。正しい意見を言っている人を一人えらんで、その名前を口には書きましょう。

けいこ…同じ道を何回も通らなくてもすむように、ごみを集めていたね。  
さとる…できるだけ早く集めるために、ごみの多いところから集めていたね。  
めぐみ…雨の日はごみがぬれるので、天気の良い日に集めていたね。

〔い〕 あきこさんたちのグループは、市のごみの量と人口のうづりかわりを下のグラフにまとめています。



あきこさんは、と中まで書いて「あれっ」と思いました。上のグラフのごみの量と人口のうづりかわりの二つを見て、あなたが、「なぜかな」とぎ間に思うことを口の一つ書きましょう。

なぜ、

〔う〕 今までの学習で、市ではごみをへらすど力をつづけていることが分かりました。そこで、あきこさんの学級では、ごみをへらすために自分たちにできることはないか話し合っています。ごみの量をへらすくふうについて正しい意見を言っている人を一人えらんで、その名前を口には書きましょう。

あきこ…牛乳パックは中をあらって広げ、まとめてもえるごみの日に出すといいよ。

かおる…買い物をした時は、むだなつみ紙やふくろはことわればいいよ。

たくや…小さなごみぶくろは、持ちやすいように大きな一つのふくろにまとめて入れるといいよ。

(奈良県小学校教科等研究会社会科部会:奈良県社会科診断テスト報告, 22, 奈良県小学校教科等研究会社会科部会, 1998,)



結果は、次のようになった。

#### 《結果》

- 正答 ……42.7%  
 ○誤答
- i ごみの量だけについて記述した ……12.6%  
 ii 人口だけについて記述した ……1.7%  
 iii グラフの読み取りができていない ……14.8%
- さらに、誤答例は次のようになる。
- i について  
 ・なぜ、ごみの量は増えてから減っているのか。  
 ii について  
 ・なぜ、人口は0から始まっていないのか。  
 iii について  
 ・なぜ、人口が多くなったら、ごみの量も多くなるのか。

表4の「はてな?からはじめよう」では、「なぜ疑問」が作れたことで正答としたが、表5では、資料や文章から読み取るべき内容を把握した上で、追究、発展させていくべき「なぜ疑問」を作成することができたかということの評価したのである。表5で誤答となった原因として、人口のグラフとごみのグラフの二つのグラフを同時に読み取ることができなかったことが主にあげられる。この点については、表5の問題は、「関心・意欲・態度」というより、「資料の読解能力」や「思考・判断能力」を問う問題ではないのかということも考えられる。しかし、竹田清夫が、『関心・態度』を評価するということは、『知識・理解』『能力・技能』『思考・判断』などの学習の程度、強さを評価することなのである。(竹田, 1991: 78)と述べているように、「資料活用能力」や「思考・判断能力」と絡めて、「関心・意欲・態度」を評価していることが、表5の問題の特徴である。

#### ③ テスト問題の成果と課題

表5のテスト問題の妥当性については、表4と同様、一定認められる。また、信頼性においても、ごみの量と人口の移り変わりの二つの関係を正しく読み取った上で、「なぜ疑問」が作れたのか、

作れなかったのかということでも明確な基準を示している。

田中耕治は、「一般に標準テストでは、『テストのためのテスト』といわれるような、作為的な問題を子どもたちに課することが多い。しかも、『テスト場面』は日常の授業と断絶したある種の儀式化された様相を示すことになる。このような『標準テスト』では、本当の学力を評価することができないのではないか。」(田中, 2002: 137)と指摘している。それに対して、表5の問題は、「テストのためのテスト」という形を克服し、授業場面の文脈にそった上で、「関心・意欲・態度」を評価しようとした点で成果があったといえよう。

#### IV. 研究のまとめ

本研究は、『奈良県社会科診断テスト』における情意的学力を問うテスト問題開発の改善過程について史的に分析した。その結果、「関心・意欲・態度」のテスト問題を作成する上で、以下の4点の示唆を得ることが一定程度できたといえよう。

すなわち、『奈良県社会科診断テスト』では、情意的学力を問うテスト問題として、「選択肢から自分の意見を選ばせる問題」、「自由記述による問題」、「なぜ疑問をつくる問題」という三つの作問方法が開発され、その成果と課題が実践を通して明らかになったのである。まず第1に「選択肢から自分の意見を選ばせる問題」は、主に「態度」を評価する問題である。このような問題は、作問がしやすく、評価基準が明確で信頼性を備えているが、「態度」を評価する上では、本音と建て前が異なり、児童の綺麗事の解答が多くなってしまふ恐れが高く、妥当性に課題を残した問題であること。第2に「自由記述による問題」も、主に「態度」を問う問題である。この問題は児童に自由に自分の考えを表現させることができるという点で価値はあるが、どのように評価基準を設定するかが曖昧であり、信頼性に課題を残した問題で

あること。第3に「なぜ疑問をつくる問題」は、主に「関心・意欲」を評価する問題である。「なぜ疑問」が作成できたか、できなかったかということで評価するため、信頼性を備えた問題であること。第4に、より妥当性の質を高めるためには、現実的な文脈を備えたストーリー性を持たせていくことが重要であるということである。

今後、『奈良県社会科診断テスト』が開発した情意的学力を問うテスト問題と、国立教育政策研究所教育課程センターが実施した、教育課程の到達度調査の「関心・意欲・態度」の問題とを比較考察し、より一般的な情意的学力を問うテスト問題開発の理論を明らかにしていくことも必要であるが、それについては筆者の今後の課題としたい。

#### 【註】

- (1)本研究の第一次資料である『奈良県社会科診断テスト』は、1961年度に実施され、今年度で48回目をむかえる奈良県全域の児童を対象とした社会科学力テストである。
- (2)奈良県小社研が毎年、その年度に実施した診断テストの結果を集計し、考察を加えてテスト実施校に配布している資料である。
- (3)田中耕治は、妥当性とは、目的としている評価対象をどれほどよく評価しているのかを示す概念である。一方、信頼性とは、その評価のあり方が評価しているものをどの程度一貫して評価しているかを示す概念であり、いっどこで実施しても、その評価の精度が一貫しているものであると述べている。詳しくは、田中耕治：学力と評価の“今”を読みとく、日本標準、2004、83。
- (4)大西重次に、2008年3月30日、大西宅において、「関心・意欲・態度」の観点から、奈良県社会科診断テストに入れられた経緯について、筆者がインタビューを行う。
- (5)同上(4)
- (6)同上(4)
- (7)秋元直樹に、2008年4月15日、ココス橿原店において、『奈良県社会科診断テスト』の作問する上での留意点について、筆者がインタビューを行う。
- (8)秋元直樹に、2008年4月15日、ココス橿原店において、「あなたの考えを書くページ」の問題点について、筆者がインタビューを行う。
- (9)秋元直樹に、2008年4月15日、ココス橿原店において、「なぜ疑問づくり」によるテスト問題開発について筆者がインタビューを行う。
- (10)同上(9)

#### 【引用文献】

- 中野重人：社会科評価の理論と方法、45、明治図書、1985。  
 中野重人：前掲著、47。  
 中野重人：前掲著、46-47。  
 次山信男：生活科・社会科の評価とテストの工夫 ―明日の授業を開く問題場面の展開―、34、東洋館出版、1995。  
 山崎林平：社会科の形成的評価入門、189-191、明治図書、1980。  
 東京都千代田区立佐久間小学校：『「関心・態度」を育てる社会科の指導と評価』、26、明治図書、1983。  
 佐賀県鳥栖小学校：新学力観に立つ社会科・生活科の授業づくりと評価、25、明治図書、1993。  
 次山信男：前掲書、16。  
 奈良県小学校教科等研究会社会科部会：続・奈良の社会科、267-285、2007。  
 奈良県小学校教科等研究会社会科部会：第51回奈良県小学校社会科研究大会、6、2004。  
 岩田一彦：社会科固有の授業理論・30の提言、129、明治図書、2001。  
 竹田清夫：指導要録における「関心・態度」評価の実態、教育方法学研究、第17巻、78、1991。  
 田中耕治：指導要録の改訂と学力問題、137、三学出版、2002。